

## ウタ arrangement 御手洗靖大

「短歌研究」九月号では、歴代新人賞作の掲載と「受賞の秘訣」とテーマ付けされた受賞者のエッセイが特集されている。中でも田口綾子「要素と構造の分散」という連作論が参考になった。

①「前半十首・中盤十首・後半十首」と考えたとき、この歌はどこに置くのが適切だろうか？」ということ、一首ずつじっと見て検討しました。それぞれの歌には連作における何らかの役割があり、その役割を果たすために適した位置があるように思えたからです。

連作としてまとまった数の歌を発表するとき、どのような並びにその歌を置くかということが問題になる。常々この苦悩に直面しつつも、未だ自分なりの明確な答えが見つかっていない。

連作というチームは、近代に生まれた。子規の連作の試みを、左千夫が理論的に位置つけたところからとされる（『岩波現代短歌辞典』「連作」項目執筆 俵万智）。左千夫の連作論は「心の花」（一九〇三年一月）に掲載され、論争を巻き起こした。

ところで、連作と言う時、それは、一人の作者がまとまった歌を発表する際になされる配列の趣向のことを言う。が、もっと根源的に、歌を並べることの意味をも考えてみたいと私は思う。

先日初めて書いた投稿論文が学会誌に掲載された（菅原道真とその母―『拾遺抄』所収歌の問題―「国文学研究」一九二集）。

歌集の配列から撰者の企てを見たものである。和歌集を紐解くと、歌の配列に苦心した撰者達の姿が見て取れると私は考えている。

勅撰集の撰者による配列の意識は、例えば藤原俊成の『古来風体抄』に見える。『千載集』の撰集を命じられた俊成は、過去の勅撰集（『後拾遺集』）について、「秀歌と秀歌の間にある地の歌はあまりよろしくない」と述べている。歌の集とするには、抜群の秀歌だけではなく、それを引き立てる「地の歌」が必要なのだ。

歌集全体の歌の塩梅を見る俊成の意識は、百首歌の影響が指摘されている。当時の歌人たちはこぞって百首という定数の和歌を一人で詠み、一つの作品としていた。注意すべきは、百首中それぞれ和歌には題があり、百首のモチーフが連関しない点だろう。これは、前述の左千夫の定義からすると連作とは呼ばないようだ。

定数の歌を並べ、全体に一筋の流れを見る。この意識は、百韻の連歌に至って明確となる。中世には、百句の付け合い（百韻）を基本単位として、作品となった。他者の前句に自らの句を付け、前々句に趣向が戻らないよう、世界を展開させていく文芸である。

連歌の醍醐味は前句との付合の妙とされるが、前句と前々句の意識だけがあればよいのではない。百韻全体にとってこの一句はどのように位置づけられるか、が意識されねばならない。この意識をもつのが一座の宗匠である。連歌は、一座の宗匠によって連衆の句が規制される。「私の文芸」とは様相を異にする。

宗匠というコンダクターはどのような百韻を目指すか。連歌論の『筑波問答』には、はじめは厳かに、中頃で賑やかに、終わりはおもしろく「序・破・急」の流れを意識せよとある。世界を転換させて百句を並べつつも、一筋の流れがあるのだ。